

『畦道』

作..大原渉平

○登場人物

ノリオ

そのノリオ

みどり

お父さん／指カケ

お母さん／すぐ泣き

蓮見

杉田

東野

南川さん

納棺師

ガチャマニ

その他、人影など

●
ノリオ、ぶつきらぼうに舞台上に現れて、観客へと問う。

ノリオ「今、オレのことが見える人」

ここで言う舞台とは、これから物語が展開されてゆく土台のことである。
そして、観客とはその様を見守る、文字通りの観客である。

ノリオの問いに、反応する人、しない人、様々。

ノリオ「見えるも、見えへんも、あるも、ないも、曖昧なもんや。」

ノリオ、舞台の縁に腰掛ける。

そこから舞台中央を見つめる。

ノリオ「見てる人が、見てないふりしたら、あるもんもないし。ないもんがあるゆう風に見てもたら、それはもう、あるもんや。」

ノリオ、観客へと問いなおす。

ノリオ「えー、まだ発言してよろしいか。」

反応があつてか、無くてか、ノリオは語りを進める。

ノリオ「家にはようさん本があつた。おじいが好きやったし、まあ、おとんも好きやったんやろう。いくつか、彷徨うようにペラペラめくって読んでみたら、私小説、ゆうもんを見つけた。作者が嬉々として、自分のことを語ってゆく。ほんでな。まあ、オレはそんな人間ができた方でもないもんやから、そういう、嬉々として自分を語ってる「そいつ」がいることが、気持ち悪うて、恥ずかしいて、なんや痒うなってきたのを覚えてる。」

ノリオ、観客に構わず、語りを進める。

ノリオ「そやけど、今、オレがこうやって語ってゆく、その言葉自体も、どっかの誰かが文字にしたり、口にしたりすれば、それはもう、立派な立派な私小説。そう思うと、反吐が出そうになるから口を嚙みたくなくなるけど、でもまあ、聞いたってほしい。はつきり言う。オレはオレが嫌いや。嫌いで嫌いじゃあ無いのや。だから、ありがとう。いつかどうやったって、人間は死ななあかんゆうことが、オレにとっては救いであつて、待ち遠しい。そうゆうもんや。」

ノリオ「だから、オレが今からゆう言葉は、自分のことが好きで仕方なくて聞いてほしい、嬉々とした言葉でなんか無くて、むしろ嫌い。嫌で、嫌で仕方がない、オレの呪いの言葉やと思って聞いてほしい。」

ノリオ、じっと観客を観る

ノリオ「自慢やないけど、オレは体だけはデカかった。走れば一等賞。喧嘩したら、誰にも負けへんかった。年に一度の山城神社で行われてた、ちびっこ相撲大会では負けたことなんて一度もない。おともも殴った。おかんも殴った。うざったらしい妹も殴った。そんなオレや。」

ノリオ「今、オレのこと、見えるよな。」

その問いと重なるように、舞台上に人影がちらつく。

それらは明確な意思を持って舞台に登場しているようには到底思えない。

星の瞬きのように、ゆらゆら、ぱたぱたと、人影がちらついている。そんな印象。

ノリオ「・・・昔な、おじいと、田んぼの畦道歩いてた時や。時刻も遅うて、確かあれは蛍見に行った帰りのことやったと思う。」

ノリオ、舞台の中央か、そのもつと先をさす。

ノリオ「田んぼの畦道歩いてて、ほしたら、田んぼの向こうの、向こう側に、なんや人が踊ってるのが見えるんや。ゆうても5月の終わりとかで、田植え終わった頃の、水の張った田んぼの中でや。」

ノリオ「そんでオレはな、おじいに聞くんや」

いつの間にか、その、「少年のノリオ」が舞台へと現れる。

実際に少年かどうかはわからない。

ただ、ノリオの語りが「それ」を少年へと描き起こす。

舞台上のノリオを「そのノリオ」と呼称する。

そのノリオ「なあ、おじい、あれ、誰なん」

ノリオ、のっそり立ち上がって、そのノリオの側へ。

どこか、おじいのように見えてくる。

ノリオ「そしたらな、おじいはちよつとびっくりして、オレに言うんや。「お前、あれ、見えるんか。」」

そのノリオ「見える。あれ、誰なん、何してはるん」

ノリオ「ほんだら・・・おじいは少しだけ慎重になって・・・言いよんねん。「あれはな、見たあかん。黙あてはよ帰るぞ」」

そのノリオ「でも、おじい」

ノリオ「ほしてな、あれはな、誰か、やない。何か、や・・・見たあかん。はよ帰るぞ。」

そのノリオ「誰かやのうて、何かて、何。なんなん。なんであの人ら踊ってはるん、」

ノリオ「人らやない。あれらや。もうこの話は終わりや。」

ノリオ「ゆうて、おじいがちよつと怖なつて、オレは黙つて家に帰った。・・・なあ、じゃあ、今、あれらが、見える人。」

ノリオ、観客に問う。

ノリオ「・・・おじいは言いよつた。人じゃ無いと。でもオレは見たんや、誰かが田んぼの向こう側で、ずちやずちや、じゃぼじゃぼ、いいながら踊ってるんを。それはおぼろげやけれど、手が・・・」

ふと、ノリオ、自分の手のひらを見つめる。

ノリオ「手は、いくつあったんやろか。」

ノリオ「足は・・・」

そして、ノリオ、自分の足を見つめる。

ノリオ「足もいくつあったんやろか。」

ノリオ「頭は・・・」

ノリオ、ゆっくりと、舞台の中央、そしてその向こう側を見つめる。

ノリオ「オレは、見た、あれに、なんて名前をつけたらええのか、それをずっと、考えとつた。」

そしてまたポツリと、

ノリオ「今、オレのことが見える人。」

ノリオ、問う。

しばらくの静寂。

ノリオの存在を空間で確かめるような、そんな時間。

ノリオ「そんなことがあって一ヶ月後に、おじいのお葬式があった。」

チーン・・・チーン・・・と鐘のなる音。

葬式に集まる人々がいつの間にか舞台に現れる。

その中に、当時の、「そのノリオ」も存在した。

どこからか、お経が聞こえるような気もするし、お焼香が香り立つような、なんの変哲も無い、普通の田舎のお葬式の様子。

ぬっと、納棺師が現れる。

納棺師「では、御遺体を棺に移しますね。あ、お孫さん、そっち持ってもらって。お父さんそっちお願いしてもいいですか」

そのノリオと父親らしき人物、そして幾人かの人でおじいを棺へ移す。

ノリオ「オレがあんまよう覚えてないときにおばあは死によったから、つまり、オレにとって初めての葬式やった。なんや神妙な顔して大人どもが静かあしとるんが、キミ悪かった。こいつがおとん。ほんであいつがおかん。そこに座つとんのが妹のみどりや。」

お父さん「おい、ノリオ、何ぼうつとしてんねや」

そのノリオ「・・・おお」

納棺師「せーので行きますね。せーの」

おじい、棺に移す

納棺師「ああ、やっぱし」

南川さん「大きい人やったしな」

納棺師「では、おじいさん膝ちよつと曲げさせてもらいますね。」

おじい、棺に収まらなかった。

集まっている人たちはしみじみとおじいを偲ぶ。

お父さん「・・・野球とかすごい好きな人でしたので。なあ」

お母さん「・・・はい」

納棺師「ねえ。よう町民運動場でキャッチボールしてはるの見たことありますわ。大きい人でしたしね。ちよつとだけ曲げさせてもろて、いかせてもらいますね。」
お父さん「すんません」

と、ロウソクが一本。
急に、煌々と輝く

南川さん「ああ、おじいさん、行ってきますゆうたはるわ。ほれ、ろうそく。見てみ、ノリオくん」

そのノリオ「おおん」

ノリオ「おじいの遺体、動かすゆうとときに、ろうそくがぼうつと燃え盛ったん覚えてる。納棺師のやつは、」

納棺師「ああ、ほんまですな。御遺体から、リンが出てますから。やや、おじいさんお別れ言うてはりますな。ほな、」

ノリオ「とか、なんとかいうとったけど、オレには、やっぱりおじいがまだそこにおって、だつて人間の形しとるし、だからおじいがオレらに語りかけとるんちゃうか、とそう思った。一つだけはつきり覚えてることがあるんやけども、それはおじいの額を触ったこと。その冷たかったこと。おじいはまだそこにおる。そやけども、おじいはアホほど冷たい。なんやそのヘンテコさが当時のオレには焼きついた。冷たかったことが、焼きついた。」

納棺師「ほな、お別れにお菓子やら入れはってください」

お父さん「プラスチックとかのもんでも大丈夫ですか」

納棺師「ええ、まあ」

あたりの人々、お菓子や花やいろんなものを棺に入れてゆく

お父さん「はい。ほれ、ノリオ」

そのノリオ「・・・おお」

お父さん「お母さん、ほら」

お母さん「いや、お父さんやらはってください」

と、その中に、

そのノリオ「野球選手名鑑。」

納棺師「おじいさん、喜ばはりそうですね。」

お父さん「そや」

そのノリオ「ん」

お父さん「ノリオ、お前、あれ持ってきたってえな。バット。」

ノリオ「バット」

お父さん「バットバット。おじいちゃんよう持ってはったやつや。入れたって。」

そのノリオ「・・・みどりに行かせろや。なあ、みどり、」
お父さん「あほいえ」

皆の集まりから少しだけ離れたところに、みどりは座っている
一同、みどりの方をすつと見る。

みどりは、座っているとと言うより、ぐったりと、横たわっているに近い。

皆、そのみどりの様子を無かった事のように、ごまかしながら、
その後、またおじいへと視線を戻す。

みどり「何」

そのノリオ「なんでそんなせなあかんねん」

お父さん「・・・もう、ええわ」

納棺師「おじいさんもね、ノリオくんが野球やってんの、見たかったんとちゃいます？」

そのノリオ「・・・どうやろうな」

納棺師「ノリオくん、中学校入ったら野球部入りいや」

そのノリオ「いやあ・・・」

納棺師「でも、おじいさんとキャッチボールしたはったとき、」

そのノリオ「いや、ぼく、おじいとキャッチボールなんて、してませんから」

納棺師「え、ああ、じゃあ、あれ誰でしたんやろ」

そのノリオ「・・・」

お父さん「ないなあ、バット。ないですわ。」

ノリオ「ふと、聞くんやけど、おかんさ。」

聞こえるはずもないが、舞台の縁から、お母さんに問いかけるノリオ。

そのノリオ「棺に、ついでにどっちか入れるとしたら、俺かみどりかどっち入れたい。どっちの方、棺に入れて燃やして、なかったことにしたい？」

お母さん、しばらくしたのち、

お母さん「・・・しゃあないですわ。」

納棺師「では、葬儀場までお運びしますね」

お母さん「さあ、行きましょう」

そんなこんなで一同、棺を運ぶ。

納棺師「すんませんが、車こここまで入れられへんから、畦道だけ皆さんで持つてもらっていいでしょうか。」

人々、口々にわかった、などポツリと呟く

おじいを乗せて、畦道をゆく。

遠くの方で、キジバトが鳴いている。

キジバト「ほーほー、ほほー、ほーほー、ほほー、……」

棺を男手何人かで車まで運ぶ。

ノリオ、畦道の途中で、田んぼの真ん中の方を見る。

ノリオ「おじい、ほら、もう最後や。教えるや。向こうの方で、田んぼの真ん中か、もつと向こうで、誰かがおるんやろ。誰かじゃないんか。何かがおる、そうやんな。あれから見えへんねん。なんか踊つとつて。くるくる回って、なあおじい、あれ、誰なん、なんなん。なんの形してんのか、目をこらすけど、わからなかったあの夜。今日は、日差しが強うて、田んぼに反射して、水面がキラキラしとる。またおるかもしれん。オレは目をこらす。見えへん。あれが誰なんか、なんなんか、わからんままや。おじい、行ってもええんか。この畦道、降りてチャプチャプ行って、田んぼの真ん中まで行って、あれがなんであるかを、見に行ってもええんか。おじい、ちゃんと最後まで言えよ。言ってから、死ぬよ。俺は球技が嫌いやった。野球が一番嫌い。理由は簡単や。おじいが好きやったからや。おじいがよう野球見てたせいで、テレビ見たいもん見られへんかったこと、多かつたからな。おじい、あれなんなんやったんや。何色や、なんの形しとんのや。なんの形しとったら人間や、なんの形しとったらそうじゃないんや。おじい。」

そして、場所が移り、そこは火葬場。

中央に棺があり、参列者周りに数名。

斎場職員が棺を鉄の扉の中に押し込んでゆく。

人々は、粛々とおじいを火葬してゆく。

ノリオ「今、おじいのが見える人」

ノリオ、問う。

しばらくの間、返答を待つ。

ノリオ「おじいは煙になって登って行きよる。あの煙、あの筋に乗って、おじいがおじいじゃなくなっていくということが、オレにはすとんと腑に落ちた。燃えとる。燃えて、おじいは、煙に乗って、人間の形をやめていく、生きているのやめていく。そうオレには思えた。」

ノリオ「煙の筋。」

ノリオ「おじいは、死んだ。燃えることで、煙に乗って、形をなくしていった。そういう儀式やったんや」

人々もその煙を見ている。

ノリオ「なあ、今、オレのこと、見える人」

ノリオが問う。

その瞬間、暗転。



ズル・・・ズル・・・と何かが這うような音がして、次第に明転

そこにはみどりが一人、舞台上で寝転がっている。

外ではほーほー、ほほー、ほーほー、ほほー、とキジバトが鳴いている。

相変わらず、舞台の縁に座っているノリオ

ノリオ「この話をするためには、オレの家族のことを、まずは話さなあかん。」

じつと、みどりをみる。

そこに、そのノリオがやってくる

ノリオ「まず、ここにいる、それが妹」

そのノリオ「・・・おい」

みどり「・・・何。」

みどり、ふわふわとした返答

そのノリオ「おかんが飯やって」

みどり「ご飯」

そのノリオ「どうせしようもないもん作っとんねんやろ」

みどり「うち、行かれへん」

少しの間。

ノリオ「今、こいつのことが見える人。」

ノリオ、問う。

そのノリオ「・・・腹たつ顔しとんな。お前、ほんま。」
みどり「うち？」

そのノリオ「見てるどイライラしてくんねん。」

みどり「そうかな」

そのノリオ「お前、こっち見んな。」

みどり「・・・うち、」

そのノリオは、立ち上がったみどりを軽く、肩を小突く。
すると、ビターン、とみどりは転げる

そのノリオ「なあ、見んなや」

またも、そのノリオは、立ち上がったみどりを軽く、肩を小突く。
すると、ビターン、とみどりは転げる

何回も立ち上がろうとするみどり。

そのたび、そのノリオは肩をこずいてみどりを転ばせる。

そのノリオ「お前のその糸みたいな目、きしよいねん」
みどり「うち？」

しばらくしたのち、やがてそこに父親と母親の姿が現れる

お父さん「おい」

そのノリオ「なんや」

お父さん「・・・」

お父さん、長い沈黙の後

お父さん「お昼ご飯やゆうてるやろ」

そのノリオ「それのみどりに言いに来たってんねんやろ」

お母さん「・・・」

お母さん、黙って見ている

ノリオ「これがオレのおとんとおかん。なんてことはない。いつもわあわあ言うて来よるけどついたら終いや。」

お父さん「なあ、お前こないだ田植えなんで手伝いにこうへんかってん
そのノリオ「・・・」

お父さん「やる言うてたよな」

そのノリオ「嫌やねん」

お父さん「嫌やねんて、お前・・・手伝ってくれよ。」

そのノリオ「・・・」

みどり「今日のご飯、何なん」

皆、黙っている

そのノリオ「おい。今日のメシなんやねん。」

お母さん「そうめん。」

ノリオ「ほんでもってこのおかんがまあ腹たつ。すぐ泣きよる。オレがこうであるからなか、すぐ泣いてわめきよる。」

そのノリオ「なんて？」

お母さん「そうめんや」

そのノリオ「なんやそうめんか。クソやな。」

お母さん「・・・」

お母さん、その場にうずくまる

お母さん「もう、嫌やわ。もう、全部が嫌。」

お父さん「お母さん、おい、今は」

ノリオ「だからこんなやつ「すぐ泣き」や。すぐ泣くからすぐ泣き。それが嫌やから何べんもどついたった。まあ、ほしたらそのたびにおとんが飛び出て来よったけども。」

お母さん「もう、お義父さんはいらへんねんし、あんな田んぼ売ったらよろしいねん。」

お父さん「いや、そんな、そういうわけには」

お母さん「嫌や。もう、嫌。あんなはいつも何にもせえへん。黙って、いるだけや。うちがいつもなんでもしてる。お義父さんの世話かて私したし、この子かて私がどんだけ歩みよってる思うんさ。」

ノリオ「そのおとんが、こいつ。なんのことはない。何にも思わん。小学校の3年か4年のとき、その時も「すぐ泣き」（おかんのこと）をボコボコにどついたたら、おとんが出てきてオレのこと引っ叩きよった。まあそれ自体はいつものことやったんやけど、その日、オレはお

とんを殴り返して、殴って殴って、前歯折れるまでどつき回したった。そしたら、その頃から大人しなりよった。」

お父さん「お母さん」

お母さん「もう、いやや。こんなんうちの人生と違う。」

お父さん「ちよっと、お母さん。」

ノリオ「まあ、あと、こいつ（おとんのこと）は指が一本ない。コンバイン言うて、農業機具にはさまって指飛ばしよった。アホやと思った。葉っぱ刈り取るだけの機械に指一本持つてかれとる。こればかりはほんまにアホらしいと思う。それで、ついにその指は見つからんかった。だからこいつは「指カケ」や。指一本無い「指カケ」

ここからお父さんのことは「指カケ」

お母さんのことは「すぐ泣き」と呼称される。

ノリオ「なあ、指カケ。」

ノリオは指カケとすぐ泣きをみながら蔑むように、

ノリオ「おい、すぐ泣き。」

しかし、その声は二人に届いていない。
しばらくの間

指カケ「・・・ええから、お前ら、とりあえずメシ食べえ」

すぐ泣き「（うずくまる）」

そのノリオ「こいつが作ったようなもん、食うか、ボケが。」

そのノリオ、出てゆこうとする。

指カケ「おい、どこいくねん」

そのノリオ「別に。友達と遊んでくるわ」

指カケ「メシはよ」

そのノリオ「その、そいつにゆうとけ。もつとましなもん作ったら食うたるわってな」

去ろうとするそのノリオにみどりが反応する。

みどり「お兄ちゃん、どこ行くん」

そのノリオ「どこでもええやろ」
みどり「うちも、うちも着いていく。」
そのノリオ「はあ?・・・着いてくんねんやったらさっさとせえや。」

ノリオ、もう一度みどりを小突く。
倒れるみどり、それでも懸命に立ち上がって着いていく
去ってゆく、そのノリオとみどり。
おそらく家では、泣きじゃくる母親がいるのであろう。

ノリオ「なあ。・・・今、家族が見える人」

再三に渡って、ノリオ、問う。

ノリオ「家族なんてガチャポンみたいなもんや。選んだもんと違う。アタリもあればハズレもある。それは、」

ノリオ、舞台上で泣いているすぐ泣きとそれに寄り添う指カケをみる

ノリオ「それは、あいつらにとっても同じであって、オレはまずあのすぐ泣きの一個前のおか
んから生まれた。もう、何も覚えてない。オレがこういうオレであるからか、家出ていきよつ
て、それで2回目のあれがそれや。もつといいガチャポンがでくんもんかとオレは思うた。や
つとの2回目やろ。なんであんなすぐ泣く女が来よるんや。しょうもない!それで、できた子
がみどりや。ほらな、ガチャポンや、何もかもが勝手に決まって勝手に終わる。」

ノリオ、舞台の縁に乱暴に座り直す。

ノリオ「考えれば考えるほど、腹が立つ。周りは全て、山、山、山。山に囲まれたここで、オ
レはどうかしてしまったんやと思う。嫌いや。心底嫌いやわ。こんな田舎、蹴散らしたりた
い。友達のどいつかが言うとした。人間、同じ色に囲まれてたら、頭おかしくなるらしい。ほ
したら、この縁に囲まれたとして、その反対、赤。赤が見たくて仕方なくなるらしい。緑の箱
に閉じ込められたニンゲンは、その反対の赤、赤、赤が見たくて自分の体を引っ掻き回す。血
が出る。嬉しなる。そう言うことらしい。」



キジバトの鳴き声が大きくなる

舞台には3人の少年たちの姿。

蓮見「やねんて。」

東野「なんなんめっちゃ怖いやん、その話。」

杉田「ほんまやな。蓮見くん、それどこで知ったん」

蓮見「町の図書館や。貸し出し禁止の怖い本で知った。」

杉田「すげえな」

東野「すごいな」

杉田「え、じゃあ、閉じ込められた人はどうなんの。」

蓮見「どう言うこと？」

杉田「閉じ込められた人は血見たくなって引っ掻き回して、どうなんの。」

蓮見「それはな・・・」

東野「それは・・・？」

蓮見「死ぬらしいで」

杉田「ヒャー！」

東野「もう、蓮見くん、怖い話やめてや。」

杉田「ほんまやわ。めっちゃ怖いわ。」

蓮見「お前がこの話してゆうからゆってんやんけ。」

ノリオ「こいつらが当時の友達や。友達いうか、いつもおれに着いて来とって、一緒に遊んでた。」

杉田「だって、蓮見くんたくさん本読んでるから話おもしろいねんもん」

東野「なあ。」

杉田「うん」

蓮見「だって本読むのおもしろいし」

杉田「蓮見くん、本いっぱい読むから賢いもんな。こないだも国語と算数、100点やってんで」

東野「すごい。すごいな。」

杉田「僕なんか、図工くらいしか好きな授業ないわ。東野くん、なに好き？」

東野「えー、なんやろ」

蓮見「いっこくらいあるやろ」

東野「うーん・・・そやなあ・・・うーん・・・」

ノリオ「オレらは川にも遊びに行ったり、森の中に秘密基地も作った。まあ、普通の小学生がするようなことや。」

東野「・・・ノリオくん遅いな」

蓮見「な。」

杉田「ノリオくんが相撲の練習しよゆうたのにな」

蓮見「練習ゆうたかて、どうせノリオくんが勝つねんけどな。」

3人、南川さんの駄菓子屋に寄る。

杉田「おっちゃん」

南川さん「おお、あれ、ノリオくんは」

杉田「まだこうへんねん」

南川さん「そうか、ボスザルはまだこうへんか。」

杉田「しっ！ノリオくんがそんな聞いたらめっちゃキレはるから！」

ノリオ「誰がボスザルや。ここは駄菓子屋の南川さん家。オレの家からもすぐ近くにある、田舎の小さい駄菓子屋さんや。」

蓮見「おっちゃん、これとこれと、これ。」

南川さん「はい。240円」

東野「僕はこれ」

南川さん「はいはい。150円な。」

少年たち、駄菓子を食べ始める。

蓮見「東野くん、何買ったん？」

東野「え、ヨーグル。」

蓮見「美味しそうやな。それにしたよかった」

東野「蓮見くんは？」

蓮見「僕、ラーメンババア」

東野「一個あげようか？」

蓮見「ええよええよ」

くちやくちやいわせながら杉田

杉田「遅いな、ノリオくん」

蓮見「くっさ。何買ってん、杉田くん。」

杉田「え、スルメ」

蓮見「クサイわあ」

東野「え、別にそんなことないよ」

蓮見「そうか？おっさん臭いやんか」

杉田「でもうまいからいいやん！一個あげよか」

蓮見「いらんよ」

杉田「一個あげよか」

東野「ありがとう。でも、いい。」

3人お菓子を食べている

杉田「そや。今日はこうへんのかな、「あいつ」」

蓮見「お前、その話もうやめとけって」

杉田「だって、めっちゃきしよいやん。なあ。「あいつ」。「ガチャマニ」。」

ノリオ「どこの町にもおるやろう。ただの変なおっさんや。昼間から仕事もせんとガチャポンしとる。」

杉田「南川さん、ガチャマニ今日は来とらへんの」

南川さん「ガチャマニて。お前らな」

東野「・・・」

杉田「だって、こないだガチャマニやばいことしよってんで。なあ、東野くん」

東野「・・・いや、もう別にええねん」

南川さん「あんな。山城のシヨウジさんのことそう呼ぶのやめなさいや」

杉田「なんでやねん、おっさんのくせしてガチャポンばかりしとるし。おかしいやんそんなん。」

南川さん「まあ、いや、まあ・・・東野くん、なんや、大丈夫やったんか」

東野「大丈夫」

杉田「大丈夫ちゃうし。だって殴られたんやろ」

南川さん「お前、それ、ほんまか・・・。ほんま、ちよつと言ったらなあかな。」

東野「いや、それはこないだノリオくんがガチャマニに悪口言うたから」

蓮見「まあ、もう、東野くんもええゆうてるし、な」

杉田「いや、やり返したたらええねん」

蓮見「やり返せへんよ」

杉田「やり返せるよ。ノリオくんやったら。ノリオくんやったら大人でも相撲で勝てる思うわ」

南川さん「あんな、お前らな。大人、からかうもんちゃうぞ」

蓮見「おっちゃん違うねん、あれはノリオくんがな」

南川さん「まあ、いろいろあるかもしれんけど、シヨウジさんにはな、もう、あんまりな、」

そこで、杉田がいきなり「づー」と喚き出す

ノリオ「太った体。でっぷりと腹がでとる。どこやかの野球チームの野球帽、ハゲて色あせて、黒色が薄ぼんやり小豆色しとる。髪の毛はしっとり濡れていて、何日も風呂入つたらんねんやろな、そういうのがなんとなしにわかる。ぼやつとあぶらの臭いがしてくる。顔も鼻もブツブツだらけや。」

南川さん「おい」

杉田「ガチャマニのまね！」

またも、杉田がいきなり「づー」と喚き出す

そして「ガチャポン・・・ガチャポン・・・」と繰り返し呟く

ノリオ「そのガチャマニはいつも黒いママチャリ乗って、でっぷりした体を小さいサドルに乗せて、フラフラしとった。南川さんここでガチャポンして、買い食いして、昼間っからやぞ。大の大人が。そんなやつや、どうや、ロクでもない大人やろう。」

蓮見「もう、杉田もやめとけよって」

杉田「なあ、山城神社で今年もお祭りあるけど、ガチャマニって山城神社の人なんやろ、おっちゃん」

南川さん「そやなあ」

杉田「え、じゃあ、なんなん山城神社継ぐの、ガチャマニなん！神主なん！やば！」

そこで、またも杉田が「ぐー」と喚き出す

南川さん「あんな。あんな大人のややこしい話に、子供は入ってこんでええんや。ええから、はようお前ら、遊んでき。」

チリンチリン・・・

自転車に乗った太った男が現れる

少年たちはその様子を見るだけしかできない

ノリオ「オレはまあ、ガチャマニが嫌いで、見かけるたびにガチャマニ、ガチャマニ、言うた。まあ、ガチャマニゆう名前つけたんもオレやしな。」

舞台の縁からその太った男をにらみつけながら、ノリオ、

ノリオ「ほんで、煽って煽って、ガチャマニのアホ、ボケ、きしよいねんゆうのをずっとゆうてたらある日殴りかかってきよった。オレは別にビビらへん。オレかて殴り返したった。流石に大人の体重には勝てへんからか、その頃のオレは負けてもうたけど、今のオレならなんてことはない。けど、それがあってから学校の終わりの会で忠告された。先生にや。あんまり山城神社のショウジさんのことをバカにしてはいけませんと。杉田は行儀よう返事しとった。馬鹿やさかいな。蓮見は黙とった。東野は、オレと一緒にその殴られに参加したもんやから、ビビとった。ガチャマニ。そもそも子供相手に殴りかかってくるんが、おかしい思う。」

ノリオ「ほしたら、オレがあいつらのとこ着く前に。つまり、まだオレがいいひん時に、南川さんの駄菓子屋に、ガチャマニが現れよった。いつもの通り、誰に喋ってんのかわからんような、ごによごによを語って。自転車から降りよる。ゆっくりゆっくり、ガチャマニは蓮見と杉田と東野のいるところに近づいてきよる。ガチャポンがしたいからや。」

少年たち、蛇に睨まれたカエルのように、動かさず、ガチャマニが来るのを見ている。

ノリオ「ガチャマニはガチャポンをしよる。大人のくせして。蓮見も、杉田も、当然東野も、それを見るしかでけへん。南川さんも相手は客や。なんも言わんと、店番しとる。ガチャマニがニマニマしながらガチャポンを、大人らしく何回も回しよる。あいつらはオレらと違って金持つとるさかいにな。」

ノリオ「オレは、ガチャマニが、本当は東野に何したか、知ってる。ガチャマニは、きもい。それは見た目のことだけやのうて、中身もきもい。青白い東野のことをいつも見とったんを、オレは知ってる。ほんで、東野がおる時狙ってチャマニはオレらのとこに来よるのを、オレは知ってる。」

ノリオ「杉田はアホやけど凶工がうまい。蓮見は頭いいし、おもしろい。東野は、いいとこないけど悪いやつ違う。だからこいつらに何かすんのはオレが許さん。」

そのノリオ、舞台に現れる。
待ってましたとばかりに、杉田と蓮見と東野。

そのノリオ、足をゆっくりあげる。

ドン！

四股を踏んでいるのだ。

ちびっこ相撲大会の本番なのか、
ちびっこ相撲大会の練習なのか、
それともガチャマニへの暴力なのか、
何かわからないが、遠くで鳴く、キジバトに合わせて
行司が「ハツケヨーイ・・・」
と轟くような気がした

ノリオ「ノコッタ！ノコッタ！ノコッタ！ノコッターーー！」

そこに描き出されるのは、そのノリオとガチャマニが取っ組み合いをしている様。

それは果たして相撲なのか。暴力なのか。

それは誰にもわからないがそのノリオとガチャマニが肉体と肉体をぶつからせている。

少年たち、「わー！」と歓声をあげている。

まるで、ちびっこ相撲大会の本番の歓声のよう。

もしくは、ガチャマニへの暴力に対しての悲鳴。

少年たちだけでなく、たくさんの人影が現れ、

歓声、悲鳴、歓声、悲鳴、歓声、悲鳴、

そのノリオ、ガチャマニを投げ飛ばす。

あたりに静寂が訪れる。

そこには、そのノリオが立っていて、大の大人が一人倒れている。少年たち、いつの間にか消えていく。南川さんの駄菓子屋も消えてゆく。

そこに倒れたガチャマニであった男だけが横たわっている。

ノリオ「・・・」

そのノリオも、ノリオも、そして後ろから付いてきたみどりも、そのガチャマニを見つめている。



舞台は急に夜の家である。

ひゅうと、夜風が吹き、田んぼからカエルの鳴き声がする。

横たわっていたガチャマニであった男はもう、いない。

昼間のガチャマニの件でカンカンに怒っている指カケとすぐ泣き。

指カケ「お前な、ええ加減にせえよ。」

指カケ、かけた指でそのノリオをこづく。

そのノリオ「ああ？何すんねん。痛いやないか。」

ノリオ、凄んで見せると、萎縮する指カケ

指カケ「あのな、」

すぐ泣き「あのな山城さんから電話あったんや。お宅の子とトラブルあったみたいで、て。」

指カケ「あのな。前も言うたやろ。山城さんのシヨウジさんとは関わるな。」

そのノリオ「なんでや」

指カケ「なんでて」

そのノリオ「なんで関わったらあかんねや。誰が悪い？昼間からフラフラして、大人のクセして、おっさんのクセしてガチャポンやつとるようなやつ。そんなやつどついて何が悪い」
指カケ「もう、お前のトラブルはこりこりなんや。」

そのノリオ、指カケの肩を小突く。

指カケ、姿勢を崩し、倒れる

指カケ「お前なあ」

そこに駆け寄るすぐ泣き。

指カケ「なんでもや。なんでもええから、もう山城のシウウジさんには関わるな。親が言うてんねや。聞け。それくらい。どつくぞ。」

そのノリオ「どついてみるよ。なあ」

指カケ、立ち上がりノリオに凄んでみせる。

握りこぶし。

しかし、欠けた指が気がかりなのか、こぶしを握れない。

凄んだはいいものの、ヘナヘナとその場に倒れてゆく指カケ

その倒れた指カケに、またがるようにしてそのノリオ覆いかぶさる。

なんどもなんども小突く。

その度に、指カケは体をうねらせビターン、ビターン、と音を立てる。

暴力である。

すぐ泣き「あんた！」

すぐ泣き、泣き喚きながら、後ろからそのノリオを押さえつけようとす

しかし、そんなこと御構い無しにそのノリオはすぐ泣きを吹き飛ばす

すぐ泣き「めちやくちやや。めちやくちやや、こんな家。」

そのノリオ「そうや、めちやくちやや。めちやくちやにしたんは誰や。」

すぐ泣き「あんたや。あんたは私が来た時からそうや。気に入らんことあったらなんでも手え出して。あんたは人間違う。ばけもんや。恐ろしい。気持ち悪い。前のお母さんも逃げ出すもわかるわ。」

そのノリオ「ばけもん。」

すぐ泣き「ばけもんや。あんたなんか。」

そのノリオ「どついたらるか」

すぐ泣き「ほれ見い。ほれ見いや。手出すんか。私、お父さん、殴るんか、これ以上。ばけもんや、鬼や、なんちゆう子や。ほんま、人間ちやうぞ、あんた。」

わ、わ、わーん、とすぐ泣きはその場でまたも泣き散らす

そこにぼんやりとみどり現れる。

すぐ泣き「いやや。ほんまに。もう辞めたい。こんな家。」

そのノリオ「みどり、こんでええぞ。」

みどり「お兄ちゃん、何してんの」

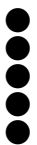
そのノリオ「何もしてへん」

すぐ泣き「私が来たかったのはこんな家違う。」

指カケ「お前。ノリオ。お前、もう出て行け。」

そのノリオ「みどりは」

指カケ「何いうてんねん。みどりは一人で歩けへんやろ。話もできひんやろ。お前は、ほんま、なに狂ったこと言うてんねん」



ノリオ、問う。

ノリオ「あの、みどりが見えますか？」

舞台上には、みどり。

その少し奥にそのノリオ。

舞台の縁にノリオ。

ノリオ「見える人、どんな形、してますか。」

しばらく、問う時間が続く。

静寂。

ノリオ「みどりは、生まれつき、まず手がなかった。足もあるんかないんか、微妙なところや。そして、目は見えへん。もしかしたら聞こえもせんのかもしれん。そんなみどりをオレは何回もどついたことがあった。ムカついたことがあったから。でも指カケも、すぐ泣きも、一回もみどりを怒ったことはない。あいつらにとってみどりが大切だから？ほんまにそやと思えますか？そんな訳ない。アイツらはみどりを人間の形してない、思うとる。人間の形してなかったら、それは人間じゃない？かわいそう？みどりは何モノ？」

みどり「お兄ちゃん」

そのノリオ「待っとれ。みどり。」

ノリオ「オレは、いつもみどりと話した。みどりは応えている。そうオレは思った。みどりと外へと出る。オレはいつも、カゴ車押して、みどりを連れてやった。みどりは歩けへんからな。」

ノリオの語りではカゴ車とあるが、
舞台上の描写としては、みどりの手を取り、そのノリオ、ゆっくり歩く。
盲目の人を案内するような様で描き起こされる。

そのノリオ「みどり」

みどり「何、お兄ちゃん」

そのノリオ「ほし、すごいぞ」

みどり「ほし？」

そこは満天の星空の下

そのノリオ「あんな親、ガチャポンで替えたったりたいわ。」

そのノリオとみどり、二人、空を見上げながら、ゆっくり去ってゆく。

ノリオはその場にとどまる。

すると、さっきまでわめいていたすぐ泣きと指カケが、

舞台の中央に寝転んでいる。

二人で一つの布団を被さりながら。

指カケ「・・・(ティッシュでお母さんの鼻を拭いている)」

すぐ泣き「・・・」

指カケ「お母さん、大丈夫か。」

すぐ泣き「(グジュグジュと鼻をふく)」

指カケ「気持ちわかるけど、ノリオにあんなんゆうたら、」

すぐ泣き「あんたは、そう思っていないの」

指カケ「いや・・・」

すぐ泣き「どう思ってるの」

指カケ「あの・・・わからん」

しばらくの沈黙

指カケ「すまんな」

しかし、お母さんは答えない

指カケ「・・・お母さん。」

すぐ泣き「お父さん。きて。」

お父さん、お母さんの布団の中に入って行く。

すぐ泣き「お父さん。お父さん。お父さん。」

泣きながら、お母さんは、お父さんにすがりつく

指カケ「う、あ、う、うお、うあー」

まるで相撲取りのように雄叫びをあげるお父さん
布団から、お父さんの、指が欠けた腕が見える。

指カケ「はあ、はあ、はあ」

すぐ泣き「痛いん？お父さん。」

指カケ「痛むもんか、何年前やと思てんねん、指怪我したんを。」

すぐ泣き「なめてあげよか」

指カケ「はあ、はあ、はあ、あかん。」

すぐ泣き「ん。」

指カケ「今日も、おれは、あかん。」

布団から這いずり出て、指カケ。

指カケ「僕なあ、おれは！・・・僕は、もう、あかん。力がはいらん。なんでこうなってもう
たんや。もう、もう、」

欠けた指を見つめてお父さんが語る。

そして泣き出してしまってお父さん。それにつられて泣くお母さん。

オンオンオン泣く、二人。

その泣き声はおそらく家の中に響いている。

その泣き声を聞いてか、聞かずか、ノリオとみどりは畦道へと進む

ノリオ「みどりは、良い。聞きたいこと聞けなくても、聞かんでもええこと聞かんで済むさか
い。」

みどり「どういうこと」

ノリオ「どうもこうもない」

ひゅう、と夜風が吹く。

ノリオ「むかーし、むかし、あるところに、」

みどり「何？なんなん？」

ノリオ「・・・力太郎や」

なぜか、みどり、ノリオに問いかける。

みどり「力太郎ってなに、お兄ちゃん」

そのノリオ「おじい昔読んでくれたことがあってな、」

ノリオ「むかし、むかし、おじいさんとおばあさんがおったそうな。おじいさんもおばあさんも働き者で。朝から晩まで畑で働いた。村一番の、働き者のおじいさんとおばあさんやと、みんなが言っていた。そんな働き者やったおじいさんとおばあさんやさかい、ほらもう、垢がポロポロでる。なかなか風呂炊いて、風呂入ることも忘れるくらい、働き者やったおじいさんとおばあさんは、その日、久しぶりに風呂に入ることになりました。そしたら、出るわ出るわ。おじいさんとおばあさんの体から、ころころ、ぼろぼろ、ころころ、ぼろぼろ、垢が出るわ出るわ。」

みどり「垢？垢ってなに」

そのノリオ「でるねん。人間は。こすったら。」

みどり「あか？赤色なん？」

そのノリオ「垢は赤色ちゃうよ。むしろ、そうやな、茶色くて、黒色や。」

ノリオ「そのときおじいさんは言いました。「そや、ばあさんや。子供もいいひんわしらや。垢、こねて、固めて、子供こさえへんか」「まあ、そらええことやねえ、おじいさん。ほしたらもっと垢集めなね」おじいさんが爪でひと掻きすれば、こんもりと、ふた掻きすれば山のように、またおばあさんも同じく、掻きむしれば掻きむしるほど、二人の体からは垢がこぼれ落ちるのでした。おじいさんはそれらを集めて、こねて、「せーの、せーの」おばあさんも一緒にになりながら「せーの、せーの」二人が作り上げた垢の人形に、二人は力太郎、と名付けたのでした。」

みどり「力太郎は、人形なん」

そのノリオ「人形や。」

みどり「人間なん？」

そのノリオ「人間や。」

みどり「どっちなん」

そのノリオ「・・・」

そのノリオ、答えられずにいる

ノリオ「杉田と蓮見と東野と、よく泥で人形作ったんを覚えてる。泥人形。力太郎のマネごとや。杉田が作った人形が一番うまかった。一番ニンゲンの形、うまかった。泥で形作って、頭、足、手、体、・・・」

ノリオ、言葉に詰まる。

ノリオ「どんな形したら、ニンゲンなんや。」

そのノリオ、ふと、星空を指す

そのノリオ「ほしいっぱいや」

みどり「ほし？」

そのノリオ「そう。ほし。」

みどり「なあ、夏の大三角形っってもう見えるん」

そのノリオ「おもんない。」

みどり「え」

そのノリオ「俺が新しい星座作る。あの明るいほしを頭にして、」

みどり「うん。頭？」

そのノリオ「あの、細かい星たちを背骨にして、」

みどり「うんうん」

そのノリオ「そんでな、」

みどり「なあ、何座？何座作ろうとしてんの？」

そのノリオ「・・・」

みどり「なあ」

そのノリオ「ニンゲン。ニンゲン座。」

みどり「じゃあ、頭あって、背骨あって、その次は？」

そのノリオ「その次は、・・・どうしたい？手いる？足欲しい？何本あったら良いかな」

みどり「私、見えたら、それ考えられたのに」

そのノリオ「じゃあ、全部や、これ、いま見えてる星全部が、ニンゲン座の、頭、背骨、手、肩、心臓、肺、足、足、足、尻尾、羽、腸、大腸、肛門、足、手、手、全部、全部がニンゲン座の星や。」

みどり「何それー」

みどり、初めて笑う。

ヒュー、と、一陣の風が吹く

ふと、ノリオは田んぼに目をやる。

そのノリオ「・・・見えるか。」

みどり「誰かいはるん」

二人、田んぼに目を凝らす。

ズチャ、ズチャ、と何かの足音。

そのノリオ「聞こえる？」

みどり「あ、聞こえる！」

ズチャ、ズチャ、
田んぼの向こうから、やってくる。
ズチャ、ズチャ、

それは泥だらけの何か達。
どんな形をしているのか、何者なのか、一切わからない。

そして、それらは踊り出す。

踊り出す、と感じているのは、ノリオの方であって、
それらは踊っているつもりなのかどうかは全くわからない。

それらはひとつではなかった。

二つも、三つも、いくつもあった。

それらが、ノリオ曰く踊っている。

くるくると、くるくると踊っている。

思わず、そのノリオ、畦道からおりてそれらに近寄ろうと走る。
ジャボ、ジャボ、と田んぼの中を走るそのノリオ。

そして、

そのノリオの手が、それらに触れる。

その瞬間、ドシャツと音を立てて、

それらは、ただの泥になって急に姿を消す。

みどり「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

遠くから、みどりが呼んでいる。

そのノリオ「みどりー、みどりー」

ノリオ、ゆっくり戻ってくる。

みどり「お兄ちゃん。今の、なんやったん。今の、なんて言うの？」

少し考えたのち、ノリオは、

そのノリオ「宿題にしよう。」

みどり「え」

そのノリオ「今のが何であるか、なんて言う名前か、考えるの、僕らの宿題にしよう。」
みどり「うん。」

思い出したように、ノリオたちを夜のカエルの鳴き声が包む

みどり「お兄ちゃん。帰る？」

そのノリオ「帰る？帰るとこなんかいやないか。あいつらのところは帰るとこちゃう。」
ノリオ「あいつら。あいつらは人間を作ろうとしとるんや。まずオレは人間やった。でもオレは、心が失敗作やった。オレは、あかんやつやった。だから前のお母さんもどっか行ってもうた。オレがあかんやつやったからや。ほしたら1回目の失敗を経て、親が代わった。指カケが新しく結婚した、あのすぐ泣き。そいつが作ったのがみどりや。みどりのことを、おじいも、多分指カケも、もちろんすぐ泣きも、なんて言うてたか知ってるか。オレは知ってる、2回目の失敗。2回目の失敗作だったと、そういう顔をしているのが、オレにはわかる。聞こえる。言っとる。だから、あいつらは、こうやって、もう、失敗しないように、次の失敗はないように、3度目の正直になるように、あいつらは人間を作っとる。来る日も来る日も。あれは、オレらへの当てつけや。あいつらは、オレらのことを人間でないと思うから、だから3回目だけはちゃんと人間を作ろうとしとるんや。替えようとしとるんや。あいつらは、自分の生むニンゲンを。現にみどりは、ニンゲンの形をせず生まれきた。オレが言うたんちゃう。おじいが見えへん。現にこうやって何を話してもみどりは聞こえないやろう。みどりは何を考えてるか、を、オレはいつも考えてる。人間の形をしてないとおじい吐き捨てるように言うてから、ずっと考えてる。人間について。ニンゲンの形について。むかつく。どついたりたい。人間であることと、ニンゲンでないことの差について、お前らをここへ呼び出して、問い質したい。オレだって人間になりたい。お前らがお前らをニンゲンでないとゆうのなら。オレらは人間になりたい。ニンゲンの形をしたい。田んぼの真ん中で踊る、回る、彼らは、何？みどりか。オレか。おじい、言えよ。言って死ぬよ。毎日毎日、こうやってカゴ車押してみどりに、この山々を見せてあげている。見えてへんて？見えてへんことないよ。誰がそう言うた。誰もそれはわからん。みどりにしかわからん。いつもみどりを連れて行く。ムカついたらどつくし。話もするし、聞いたげたりもする。よそへ連れて行くなど、指カケは言う。すぐ泣きはもう、なんにも言わん。オレは連れて行く。みどりとオレは同じことをする。同じご飯を食べるし、同じ場所に行く。同じ友達とも遊ぶ。お前らは人間という、囲い、柵、枠を決めたがる。それに収めたいんやろうが、そんなもんなんか、オレはぶち壊してやる。あいつらがオレらにそうするなら、オレらが替えたつたらええんちゃうか。あいつらは人間を作ろうとしている。オレらの代わりに。じゃあ、オレらもつくつたらええねん、替えたつたらええねん。親を。替わりの親を。」

みどり、いつの間にか人形に入れ替わっている。

何も言葉を発しない塊になっている。

気がつくくと、あたりは人形だらけ。

それも不揃いの、あらゆる形をしている人形だらけ。

ノリオ「煙が昇る、あの日を思い出す。おじいさんがニンゲンの形をなくした日。煙や。煙を焚け。煙を焚いてさ。儀式やろう。」

ここから、そのノリオが相手するみどりは人形になり、
代わりにノリオのように舞台を自由に移動する「みどり」が現れる。



みどり「儀式には何が必要なんお兄ちゃん」

ノリオ「火や。火焚かなあかん。」

みどり「火。なんで火。」

ノリオ「火焚いて、煙あげて道を作るんや。今オレらがいるんはただの田んぼの畦道。それやとどこにも行かれへん。これからする儀式はなんてことない。親替えの儀式や。新しい親を作る。そのためには、地面と空とがくっついて、大きな力が必要や。火を焚け、火や。火を焚くんや。」

夜であった時間軸は次第にバラバラになってゆく

そこに杉田、蓮見、東野が登場する。それぞれ、ロウソクを持っている。

ロウソクの火がゆらゆら揺れている。

杉田「ノリオくん。ノリオくんどうしたん」

ノリオ「なんのことはない。今から儀式を始める。」

杉田「わかった。なあ？」

東野「うん」

蓮見「儀式で何や、ノリオくん。」

そのノリオ、大きなマントをいつの間にか羽織っている

まるで王様のように。

そのノリオ「まず、お前らのことを大臣に任命する」

蓮見「大臣？大臣でなんや。儀式でなんなんや、ノリオくん」

そのノリオ「なんや、お前、オレに楯突くんか」

蓮見「楯突くも何も、わからへんのや」

そのノリオ「じゃあ、これまでであったお前のすべてのこと、わかるんか。わかって色々喋ってるんか。おじいが言うた、田んぼの向こう側のアレも、お前には全部わかるんか。わからへんかったらなんもできひんのか」

杉田「ノリオくん、僕は何したらええの」

そのノリオ「なんべんも言わすな、火を焚くねん。火を焚いて、縦横奥行きに加えて、未来も、昔も、ごっちゃにする。火を焚け。そして任命する。まず、杉田、お前は図工が得意や。図工が得意やからお前は図工を司る神様にしてやる。図工大臣や。」

杉田「めっちゃかっこええな、ノリオくん。」

そのノリオ「図工大臣、お前にはな大事な役目がある」

杉田「ハイ！」

そのノリオ「人形作ってくれ」

杉田「人形？」

そのノリオ「そや。その人形を、オレとみどりの親にする」

杉田「できるかな」

そのノリオ「やってみいひとわからん、だからやってみるんや」

杉田「それはどんな人形なん」

そのノリオ「どんな人形」

そのノリオ「お前ら」

そう言って、そのノリオ、皆を集める

そのノリオ「どんな人形作ったらええ思う？」

蓮見「そんなん聞かれても」

東野「どういことなん」

杉田「簡単や、手と足と頭作ったら、それでええやん」

そのノリオ「じゃあ、お前、杉田さ、みどりのことどう思うん」

杉田「え、」

そのノリオ「お前が作ろうとしてる人形はオレらの親になんねん。新しい人間や、そやのにみどりと違う形してて、それはそれでええのか。」

杉田「うーん・・・」

ノリオ「人形の形、わかる人」

ノリオ、皆に問う。

誰かが答えようが答えまいが、そのノリオは辺りの人形を見渡す。

そのノリオ「困ったもんやな」

杉田「どんな人形作ったら、ええのか、とんとわからん。」

そのノリオ「じゃあ、宿題や。杉田。」

杉田「宿題？」

そのノリオ「そう。どんな形したらええのか。お前が決めること。それをオレらの親にするから」

おほん、と咳払いをするそのノリオ

そのノリオ「次に、東野。」

東野「あ、何」

そのノリオ「お前は、いつもなんかビクビクしてて怯えてるうように見える。けど、それはなにかオレにはわかる。お前はみんなの気持ちを一番に考えてるんや。」

東野「そうなんかな」

そのノリオ「東野。今、みどり、なんて思ってると思う？」

みどり「私？」

東野、みどりの人形の方をみる

みどり「私、今、」

東野「ノリオくん、そんなん、わからへんよ。」

そのノリオ「いや、お前ならわかる。お前は、今日から道徳を司る神様や、道徳大臣な。」

東野「道徳大臣・・・僕が？」

そのノリオ「うん。どや、みどり、いまなに考えてると思う」

東野「・・・ノリオくんが、人間の形のこと考えてくれてるから、きっと嬉しがってはると思う」

そのノリオ「そうなんか。みどり」

もう、そのノリオの語りにみどりの人形は反応しない。

人形に問うているそのノリオ。

当のみどりは、ふらふらと舞台の縁を歩いたりしている。

そのノリオ「そんで。蓮見。」

蓮見「なんや」

そのノリオ「お前は国語が得意やさかい、国語を司る神様、国語大臣にしたいと思う」

蓮見「何したらええねん」

そのノリオ「オレらがやっていく新しいニンゲンづくりを、一つ一つ、書き残して言って欲しい。言うなれば一行日記。夏休みの一行日記や。」

蓮見「日記？僕がつけるんか。」

そのノリオ「そうや。そうして、オレが、オレらの様をみんなに残して行ってほしい。」

蓮見「・・・」

杉田と、東野が、近くにある人形の一つに火をつける。

みるみるうちに煙が登ってゆく。

その煙を頼りに、蓮見は舞台の縁に座っているノリオを見つめる。

語り手の交代のようだ。

ノリオ「じゃあ、ここで喋るんも、交代するわ。」

蓮見「僕が、語っていったらええんか。」

ノリオ「そうや。」

蓮見「ノリオくん、あのノリオくんと、ノリオくん何が違うんや。」

ノリオ「火が焚かれたやろ。そしたら儀式の始まりで、縦横奥行きに加えて、昔も未来もごっちゃになる。そこからオレはやってくる」

ノリオ、舞台の縁を、そつと蓮見に開け渡す。

蓮見「・・・今、オレらのことが見える人」

蓮見、ノリオのように、ノリオぶって、語り手となる

蓮見「・・・見えるも、見えへんも、あるも、ないも、曖昧なもんや。」

蓮見、舞台の縁に腰掛ける。

そこから舞台中央を見つめる。

蓮見「見てる人が、見てないふりしたら、あるもんもないし。ないもんもあるゆう風に見てしもたら、それはもう、あるもんや。」

蓮見「改めまして。僕、オレは蓮見です。蓮見であって、オレが語るのは、これから僕らが行うであろう、親替えの儀式です。」

ノリオ、杉田、東野はあたりにある人形の形を探り始める。

その人形たちは、様々な形をしている。

まず、頭と手が二つと足が二つのバージョン

頭と手二つに加え、尻尾だけのバージョン

手二つがない代わりに、足だけが二本のバージョン。

頭が二つあるバージョン。

それらは極めて様々である。

その中に、みどりの人形もある。

みどりの人形はそのノリオがしっかりと抱きしめている。

みどりの人形の形は誰にもわからない。

蓮見「オレらは話した。どこでどうやって儀式を行ったらええのか。儀式をするために必要なんは何か。そして杉田の宿題にした人間の形について。」

東野「なあ、ノリオくん、この石ころはなに？人間？人間じゃない？」

そのノリオ「アホか。そんな人間じゃないに決まってるやんけ。」

杉田「じゃあ、あのケロケロ鳴いとる蛙は？」

そのノリオ「バカか。人間じゃないに決まってる。」

蓮見「じゃあ、喋れたら人間か。いや、違うな。」

そのノリオ「そや。みどりは現に喋ることがでけへん。そやけど・・・」

東野「うん。そやけど人間や思う。」

そのノリオ「そや。道徳大臣の言う通りや。じゃあ、」

そのノリオ、マントを翻して

そのノリオ「お前ら、オレのことはどう思う？人間か。人間じゃないか。」

杉田「人間じゃないの？」

東野「人間やと、思うよ」

そのノリオ「じゃあ、なんで人間やと思うの？」

皆、考え込む

そのノリオ「指カケとすぐ泣きは、オレのことを人間やない、言うた。ばけもんやと。だから、あいつらはせつせと人間を作とる。新しい人間を。オレとみどりじゃない、全く新しい人間を作ろうとしとる。」

蓮見「それちゃうか。」

そのノリオ「なにや」

蓮見「人間である証は、人間を作れることちゃうか。」

そのノリオ「ほんまか」

蓮見「わからん、けど、おっちゃんとおばちゃんは新しい人間を作って、自分らがちゃんとした人間であることをわかんたいんちゃうやろか。」

杉田「人間作れるのが人間？」

東野「そうなんかな」

そのノリオ「ほしたら、みどりに人間作れるのか、試してみよう」

東野「どうやって？」

そのノリオ「東野は嫌やったら来んくていい」

東野「どういこと」

そのノリオ「みどりみたいな小さい子とでも人間作りたい思えるやつやないとあかん。」

そのノリオ「ガチャマニのところ行こう。行って、ガチャマニとみどりを結婚させて、人間を作らせるんや」

ヴー、ヴー、ヴー・・・ウシガエルが鳴き始める。

そのノリオたち、駆ける。

そして、蓮見の語り。

蓮見「力持ちのノリオくんとその一行は、訪れたのです。どこにあって？それはもちろん山城神社。山城神社のシヨウジさんを探しにノリオくんたちはやって来たのです。」



蓮見「3人は神社へと入りました。そして社の裏側へ回り込むのです。神社の社の裏に山城さんの家があることを知っているからです。」

ノリオ・蓮見・杉田・東野「ガチャマニーーーーー。ガチャマニャーーーーー。ガチャマニはどこやあーーーーー。」

蓮見「なぜガチャマニなのか。ガチャマニならばできるからです。そう。みどりちゃんと、まぐわうことができると思ったからです。他の誰にもできません。杉田も、東野も、当然僕だつて。だからガチャマニを使って、みどりちゃんに人間を作らせる。そう、ノリオくんは考えたのです。」

ノリオ・蓮見・杉田・東野「ガチャマニーーーーー。ガチャマニャーーーーー。ガチャマニはどこやあーーーーー。」

蓮見「すると、どこからともなく自転車のベルの音が聞こえます」

チリンチリン・・・

蓮見「またあの昼下がりのように僕たちは固まりました。そうです。あれです。蛇に睨まれた蛙、そんな状態です。」

蓮見「ガチャマニは、こないだ見たんとおんなじ格好をしとったのです。色のハゲた帽子。パンパンに膨れた腹がきつそうに収まっているグレーのTシャツ。汗がじわっとしみとるのがわかる。下に履いてるジャージも伸びきっていて何をこぼしたんかわかんシミでいっぱいです。」

蓮見「ガチャマニが言います」

ガチャマニ「何してんの」

そのノリオ「おっさん、会いたかったやろ。俺らに」

ガチャマニ「何言うてんの」

そのノリオ「おっさん、好きやろ」

蓮見「……と、ガチャマニがノリオくんを吹き飛ばしました。なんてことでしょう。町一番の力持ちのノリオくんが、どんな大人にも負けへんであろうノリオくんが、よりにもよってあのガチャマニに投げ飛ばされてしまいました。しかも、その投げ飛ばされたところは、井戸。神社の裏手にある井戸に投げ込まれてしまったのです。」

ヒューーと、アニメのような落っこちる音、その後、
ポチャーシューーン！と井戸にノリオが落ちる音。

杉田「ノリオくん！」

東野「大丈夫？ノリオくん」

みどり「お兄ちゃん」

蓮見「僕らは急いで井戸へと駆け寄り、その中を見ました。そして探しました。あの強かったノリオくんを。おい、おい！ノリオくーん。」

杉田・東野「おーい、おーい、ノリオくーん」

なんどもなんども声をかける杉田・東野。

井戸の中は真っ黒い水で満たされている。

蓮見「すると井戸の中から、ケロケロ……とアマガエルが鳴いているのが聞こえます。」

杉田「ん？ノリオくんどこいってもうたんや。」

東野「蛙になってもうたん」

みどり「お兄ちゃん、どこいったん？」

蓮見「もう一度僕らは声をかけます。井戸の中へ向けて、」

杉田・東野「おーい、おーい、ノリオくんやーい」

すると、井戸の奥から弱々しく声が聞こえる。

鼻をすすり、べそをかいているのである。

あの、ノリオがである。

そのノリオ「う……うう。」

杉田「あれ、蛙の鳴き声？あれ、違う、ノリオくん？」

そのノリオ「う……うう。ぐずっ……」

井戸の奥から鼻を大きくすすする音が聞こえる。

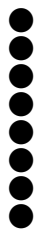
東野「大丈夫ー？」

杉田「ノリオくん、もしかしてやけど、違うかも知れへんけど……泣いてるん？」

蓮見「すると井戸の中からまたも、ケロケロ……とアマガエルが鳴いているのが聞こえます。ノリオくんは、蛙になってしまったのでしょうか。」

そのノリオ「蓮見、うそ言うんはやめてくれ。ちゃんと、ちゃんと一行日記つけてくれ」

蓮見「……ノリオくんは負けて、井戸に落ちこちて、そして、泣いてしまったのです。」



そのノリオ「う、うう。」

杉田「なあ、ノリオくん？」

東野「痛いところあるん？」

そのノリオ「うう。ううう。」

東野「大丈夫、お父さんとお母さん、呼んでこよかー？」

杉田「おっちゃんとおばちゃんに言うてくるな」

そのノリオ「やめて！」

杉田「え」

そのノリオ「オレに、オレにはもうお父さんも、お母さんも、いいひんから。」

杉田「そ、そっか。」

そのノリオ「なあ、考えたんか。ニンゲンのカタチ」

杉田「え、いや、えーっとなあ……」

杉田、周りの不揃いの人形を見渡す。

杉田「まだわからんねん」

そのノリオ「宿題やゆうたやろ。」

杉田「でも、でもなあ、ノリオくん。」

そのノリオ「なんや」

杉田「怒らへん？」

そのノリオ「なんなんや」

杉田「今、井戸落ちて泣いてるノリオくん、なんか、ニンゲンぽいで」

そのノリオ「どう言う意味や。それ。落ちこちて、情けんのうなってるのニンゲンらしいゆうんか。」

杉田「うん……」

そのノリオ「うう。ううう。うう。」

東野「なんで泣いてるのか、それだけ教えて、ノリオくん。どっか怪我したん？打った？骨折れたん？どうしたんかだけ教えて」

そのノリオ「・・・うう。」

東野「僕らだけの秘密にするから。」

そのノリオ「・・・ガチャマニが、みどりとニンゲン作ってくれへんかったから。」

杉田「・・・」

東野「・・・」

そのノリオ「ニンゲン作れへんかったら、もう、ニンゲンと違うねんや。」

みんな黙る。

東野「ほんまにそうかな、ノリオくん。」

そのノリオ「その声は、道徳大臣か。」

東野「ほんまにニンゲン作れへんかったら、ニンゲン違う・・・？」

そのノリオ「みどりーー聞こえるかあー」

みどり「何、お兄ちゃん」

そのノリオ「聞こえへんか。なんでやろな。なんで僕は、ニンゲンやゆうてもらえへんねんやろな。」

みどり「聞こえるよ、お兄ちゃん」

そのノリオ「オレ、悔しいて悔しいて、しゃあないわ。」

みどり「私、聞こえてるよ。」

そのノリオ「みどりー、こっち、こっち来てくれへんか」

杉田「え、井戸の中に？みどりちゃんを？」

東野「危ないよ、ノリオくん」

そのノリオ「危ないもんか。オレがしゃんとしたで受け止めるから、早く、みどりこっち来てくれ。」

杉田と東野、二人顔を見合わせる

東野「みどりちゃんに一回聞いてみる？」

杉田「アホか、みどりちゃん、聞こえてるかわからへんやろ」

東野「ノリオくんが言うてるし、聞こえてるよ、多分」

杉田「そんなことええよ、早くノリオくんの元にみどりちゃんを」

杉田、東野、みどりの人形を抱え込み、

杉田「じゃあ、ノリオくん、今からみどりちゃん、井戸に投げるからな。」
そのノリオ「え、投げんの？」

杉田「いくよ」

杉田・東野「せーの！」

蓮見「ボチャァー！ー！ー！うまくみどりちゃんをキャッチしたノリオくん。……
……みどりちゃんと二人きりなのだと、今、気づきました。」

杉田「蓮見くん！」

蓮見「あっ」

杉田「（二人きりにさせたろの雰囲気で）」

杉田、東野、蓮見、さっと去ってゆく

そのノリオ「みどり……」

そのノリオ、みどりの人形の体を抱きしめる。
舞台の縁では、みどりがその様子を見ている

みどり「……井戸ん中は臭かった。でも嫌な臭さ違う。なんやら、いろんな生き物が折り重なった匂い。生き物、それは動物だけやのうて植物とかも。真っ黒い水に、大小様々な生き物がいるのがわかる。微生物。微生物。苔。虫、虫、葉っぱ。真っ黒い水。でもその中でも特に大きな生き物はたったの二つ。私とお兄ちゃん。」

そのノリオ「オレなあ、オレ、みどりのことニンゲン扱いしよらへんあんな奴ら、替えたいねん。他にもいっぱいいい親がいるやろ。だから取っ替え引っ替えしても許される思うねん。オレもみどりも、しゃんとした親に替えたなら、マトモな人間になる思うねん。マトモな人間て何かって？そんなんわかるやろ、人を殴らへん、人のこと好きってゆえる、そう言うのが人間や。でもオレはそれになられへん。どんなけ時間かけてもなられへん。やからみどりを人間やないゆうやつ見ると、オレも人間やないように思えてきて苦しくなる。」

そのノリオ「なあ、みどり。みどりは人間作りたいか？人間作って、人間であること、証明したいやろ？そやろ」

人形のみどり、何も答えない。

そのノリオ「そや。みどり。もう、ここで子供を作ろう。親替えは、オレらが親になったらええねや。オレらが親になって、善い人間をつくるんや。そうしたらそこに家を構えて、庭を作って、川と陸を整えて、オレらの国を作ろう。」

そういうと、そのノリオは、抱きしめていたみどりの手をとる。

実際にそのみどりの人形に手があるかどうか、ということではなく、

イメージとして、ノリオはみどりの手をとって、踊り始めるのである。
甘い音楽にのりながら。

そのノリオ、人形のみどりと踊る。

くるくる、くるくると井戸の中で踊っている。

次第に、そのノリオとみどりに連れられて、

かき混ぜられてゆく世界。

あたりに散らばっている不揃いの人形たちも踊りにつられて、
かき混ぜられてゆく。



ふと、井戸の水面に、夜空が見える。

たくさんの星々の瞬きが水面に映える。

そのノリオ「みる。みどり。子供や。オレらの子供が生まれよった。ほら、こんなに、こんなにも、ニンゲンの形せず、キラキラと、散らばつとる。」

そのノリオ、井戸に移る夜空の星たちをかき集めてゆく。

一つ一つ、大切に。

そのノリオ「いま見えてる全部が、ニンゲンの、頭、背骨、手、肩、心臓、肺、足、足、足、尻尾、羽、腸、大腸、肛門、足、手、手、全部、全部がニンゲン。オレもニンゲン。みどりもニンゲンや。」

大事に大事にしながら、ノリオ、ニンゲンたちを集めてゆく。

そのノリオ「踊ろう。新しい国の記念に。みんなも呼んで。」

そういうと、改めて奥でゆっくりと燃えながら煙を燻っている人形一つ。

煙をあげている。その筋に乗せて、ノリオは叫ぶ。

そのノリオ「おーい・・凶工大臣ー！道徳大臣ー！国語大臣ー！」

その煙の向こう側から、みんながやってくる。

杉田「はーい」

東野「はい」

蓮見「はい」

杉田「ノリオくん。わからんけど、見よう見まねで、作ってみた。おっちゃんとおぼちゃん、人形。」

煙の向こう側から、現れたのはなんと、指カケとすぐ泣き、のゴーレムである。

指カケのゴーレム「ああ、綺麗な星空だあ」

すぐ泣きのゴーレム「本当ね。あなた」

指カケのゴーレム「一体、ここはどこだろう。」

すぐ泣きのゴーレム「本当ね。どこなんだろう。」

普通の指カケとすぐ泣きとは打って変わって嘘のような標準語で語る二人。

そのノリオ「指カケに、すぐ泣き。」

指カケのゴーレム「はい。」

すぐ泣きのゴーレム「はい。」

そのノリオ「お前らは、オレらをニンゲンじゃないと言った。それは、良いことか？悪いことか？どう思う？道徳大臣。」

東野「それは・・・悪いことやと思います。」

そのノリオ「じゃあ、どうしたらええ思う。道徳大臣。」

東野「・・・助けてあげたらどうでしょうか。」

そのノリオ「助ける？」

東野「助けてあげて、ニンゲンという柵を一度放ってみたらどうでしょうか。ほらだってこんなに、人間は眩いから」

東野は、そのノリオが抱えている光を見る。

そのノリオ「わかった。オレらが生んだニンゲンは、ニンゲンの形をしていなかった。それは、ニンゲンの形をするのをやめたのだ。時代遅れなのだ、ニンゲンの形をしているのは。ほら、輝いている。」

蓮見「それは粒子です。光の粒子です。」

そのノリオ「粒子？」

蓮見「そうです。お二人のお子様たちは、ニンゲンは、光の粒子です。ニンゲン座なのです。」

そのノリオ「そうか。オレとみどりの子は、ニンゲンの形をやめて、新しい粒子になったのか。それはおもしろい。」

そのノリオ「ところで、指カケ、指を差し出してみたい。」

指カケのゴーレム「へい。これですかい。」

そのノリオ「それや。」

指カケのゴーレム「いつの間やら、指が欠けていたんですわ。」

そのノリオ「そのことをお前は、どう思ってるんや」

指カケのゴーレム「なんだか、悲しいというか、悔しいというか、嬉しいもんじゃないです」

そのノリオ「よし。ではお前をニンゲンという柵から解き放つてやろう。すぐ泣き、お前もや。もう泣くこともなかるうに。」

すぐ泣きのゴーレム「ほんとうですか。」

そのノリオ「ほれ」

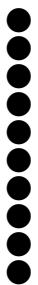
そのノリオ、指カケの欠けた指に、我が子を触れさせる。

すると、指先が光りだす。

指カケのゴーレム「わあ・・・なんだか眩い。そして、暖かい。なんだろう。心の奥、いや体の奥か、いや、そんなことはもうどうでも良い。湧いてくる、生きているが湧いてくる。」

すぐ泣きのゴーレム「本当ね。あなた。」

そのノリオ「さあ、踊ろう、みんなで。水面に我が子たちが光って浮かんでおる。みんなで輪になって踊るのだ。」



そのノリオ・人形のみどり・蓮見・杉田・東野、

そこに指カケとすぐ泣きのゴーレムが加わり、輪になって踊っている。

キラキラ輝きながら踊っている。

足場はすっかり濡れていてじゃばじゃば水しぶきが舞う。

空には星々、

水面には、ノリオとみどりの子たちが瞬いている。

粒子たちも一緒に踊っている。

その様子を、遠くから「ノリオとみどり」が見ている。

ノリオ「みどり、見えるか。」

みどり「・・・見えへんよ。」

ノリオ「ほうか。」

そのノリオ・人形のみどり・蓮見・杉田・東野、

そこに指カケとすぐ泣きのゴーレムが加わり、輪になって踊っている。

ノリオ「綺麗な月夜やった。けど、・・・空は次第に曇って、」

夜空の星たちは見えなくなる。

そして、水面のノリオとみどりの子供達も消えてゆく。

それに連なって、指カケとすぐ泣きのゴーレム、土に還ってゆく。

そのノリオ、ハッと我に帰るように、立ち尽くす。

残されたそのノリオ、杉田、東野、蓮見

踊り疲れて、ただ呼吸をしているのみである。

ただ、泥まみれで突っ立っている。

そのノリオ「・・・蓮見、早く。早く、一行日記を。まだ、まだ終わってへんよ」

蓮見、悩みながら何かを口にする。

蓮見「・・・あの、見える人。新しい国が。新しい子供が。新しいニンゲンが。誰か、いませ
んか。」

誰からの反応がないかもしれない。

踊り疲れている、そのノリオ、杉田、蓮見、東野。

空は曇っていて、もう水面には何も映っていない。

それを見て「ノリオ」は最後に問う。

ノリオ「誰か、見える人いたら、こっそり、教えてください。・・・終わります。」

観客からの反応を前に、暗転。

終わり